

助産師・看護師実習指導者講習会の効果と方法の検討

柳 紫野 (G170011)

指導教員：佐藤 祐造

キーワード：実習指導者講習会、実習指導者、学び

はじめに

看護学における臨地実習は、講義・演習とならび「授業」として位置付けられている。臨地実習は、青年期にある看護学生が、自分とは異なる発達段階にある患者を理解し、患者の生活を援助することを学ぶ難易度の高い授業である。効果的な授業展開を行うために、学内授業と同様に実習指導案が作成され、計画的に指導を行うことが必要である。厚生労働省の「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン」では、実習指導には、実習施設で学生の指導にあたる看護職員を実習指導教員として確保することが望ましいとされている。そのため、臨地実習場では、看護職員が、実習指導教員として担当が決められている。そして、臨地実習では、看護学校の教員だけではなく、臨地実習の場となる看護職員も連携をとりながら教育にあたる。看護学生が効果的に臨地実習で学ぶためには、臨地実習に携わる実習指導者の教育力は重要となる。独立行政法人国立病院機構東海北陸グループ内には、看護学校が5校ある。これら5校の看護学校は、臨地実習の大半を国立病院機構の病院で行っている。5校の看護学生が臨地実習で良い学び、効果的に学ぶ環境を整えるために、各病院では、実習指導に携わる看護職員に対し、実習指導開始前に研修を実施している。しかし、質の良い指導力のある実習指導者を育てるために、国立病院機構東海北陸グループでは、1年に1度、「保健師助産師看護師実習指導者講習会の実施要領」を基に「助産師・看護師実習指導者講習会」を開催している。講習会直後に、講習会の満足度を把握し、講習会をどう感じたか感想を聞いている。しかし、講習会を受講した研修生が何を学んでいるのか、その後実習指導で活用されているのか、どのように活用しているのかは明らかにできていない。質の良い指導力のある実習指導者を育て、看護学生が効果的な学びを得ることができる環境を作るために、講習会での学びを明らかにする必要がある。

目的

実習指導者講習会前後のレポートの分析を行うことで、受講生の講習会で求めている事柄、講習会での学びの内容や受講後の変化を明確にする。実習指導者講習会後で実習指導を経験した後のアンケートを分析することにより、講習会での学びがどのように活用されているのかを明確にし、今後の講習会の実施方法を検討する。

方法

実習指導者講習会前後のレポート分析は、平成25年から平成29年の東海北陸グループ主催の実習指導者講習会の参加し、研究協力を得られた126名分のレポートの分析を実施した。テキスト分析ソフトKHcoderを用いて単語頻度分析、共起分析を行った。共起分析では、臨床経験による区分「4～9年目の看護師」「10年以上の看護師」「6～9年目の副看護師長」「10年以上の副看護師長」、上司によるコメントによる区分「新米」「未熟」「役職」で分析を行った。また、頻出するキーワードや意味内容の類似性に沿ってカテゴリー化し分析を行った。実習指導者講習会後で実習指導を経験した後のアンケートによる分析は、平成25年から平成29年に東海北陸グループ主催の実習指導者講習会の参加し、アンケートに協力のあった86名の結果を単純集計とカテゴリー分類による分析を行った。

結果

実習指導者講習会前後のレポート分析のテキスト分析ソフトを用いた分析、単語頻度分析では、講習会前は「指導」「学生」「実習」「学ぶ」が上位を占めた。講習会後は「学生」「指導」「実習」「自分」が上位を占めた。共起分析の臨床経験による分析では、全ての臨床経験において、実習指導者講習会後では、講習会前に比べ、用語の数と共起関係が増加した。また、実習指導の具

体的な方法や実習指導への気持ちに関する用語が増えた。上司によるコメントによる区分の分析では、「新米」は、講習会後は語数と共起関係が増えた。「未熟」「役職」は、講習会前後で重複している用語が多かった。「未熟」は、講習会前後では、語数や共起関係に大きな変化はなかった。「役職」は、講習会前後共に語数は多かった。カテゴリー分析では、講習会前は、6つのカテゴリーで構成された。【実習指導に対する思い】【学びたい知識や技術】【実習指導の実際】【なりた実習指導者像】【実習指導を行う上での問題】【知識獲得以外で求めること】に分類された。講習会受講後は、4つのカテゴリーで構成された。【講習会を受講したことで得た学び】【自分自身に関する気付きや変化】【実習や学生に対する気付きや思いの変化】【目指す実習指導者像】に分類された。

実習指導者講習会後で実習指導を経験した後のアンケートによる分析、「実習指導者講習会直後に感じたこと」のカテゴリー分類では、5つにカテゴリーで構成された。【指導者講習会での学び】【思考や感じ方の変化】【他施設の者との交流】【指導者講習会で過ごしたことでの気持ち】【講習会で感じたこと】に分類された。「実習指導者講習会後に実習指導を繰り返し行って感じたこと」のカテゴリー分類では、5つのカテゴリーによって構成された。【実習指導の難しさ】【実習指導の現状に対する不満】【自分自身の成長】【変化】【実習指導で必要と考えること】に分類された。

考察

受講生は、実習指導者講習会に実習指導の教育の知識や指導方法の習得を求めて受講し、講習会受講後は、指導内容を考えて指導を行い、実習要項を読んで実習指導に臨むという変化をしている。実習指導者講習会の目標である、実習指導の知識や指導方法を身に着ける機会になっていることがわかる。実習指導者講習会で実習指導に関する知識を得たことにより、学んだ知識を活用しながら指導方法を実践している。それにより、自分なりの指導方法を考え見出す機会になっていると言える。知識を得たことにより、どのように行動したらよいかを考えることができ、行動の変化に影響した可能性がある。

講習会受講後の学びの広がり方や変化は、経験年数や勤務環境、受講動機が影響を与えることがわかった。講習会受講の対象者は、様々なレディネスの受講者である。講習会受講を効果的なものにし、様々な背景を

抱えた受講生達が目的目標を達成するためには、講習会前や講習会中に動機付けを行うことが必要である。講義の目的や活用の説明や演習中に背景をふまえた関わりをすることが必要であると言える。講習会後では、「あらたな学びや学生の変化」という結果が出ていた。繰り返し実習指導を行った後には、「指導の難しさ」「指導の現状に対する不満」と変化していた。学生の質の変化、臨地実習で求められる目標の高さ、実習指導者を取り巻く病棟の環境、看護教員との連携の難しさが影響したと考える。講習会で知識を与え、指導方法を知る機会や変化する機会を与えるだけでは、良い実習指導者の育成には不十分であることがわかる。指導を重ねた実習指導者に対し、実習指導の悩みの解決に繋がる学習や病棟や看護教員との調整力をつける学習などの機会を作り続けることが必要と言える。

結論

1. 実習指導者講習会は、教育の知識や指導方法を学ぶ機会である。
2. 実習指導者講習会は、行動を変化させる機会である。
3. 実習指導者講習会は、成長を促す機会である。

参考文献

- 沖野良枝他. (2009). 実習指導者講習会の継続・発展を目指すフォローアップ研修の効果. 人間看護学研究, 63-72.
- 原田広枝. (2001). 協働概念からみた実習指導者養成教育の現状と課題 九州厚生年金看護学校紀要 1-18
- 村上礼子他. (2013). 臨地実習指導者研修会終了後の実習指導者の実態と今後の課題—過去7年間の研修会参加者の追跡調査をもとに—. 自治医科大学看護学ジャーナル, 27-33.
- 藤岡完治 屋宜譜美子. (2006). 看護教員と臨地実習指導者. 医学書院.
- 泊祐子他. (2010). 臨地実習指導者の指導経験による指導の捉え方の変化と必要な支援の検討. 岐阜県立看護大学紀要, 51-57.
- 米田照美他. (2008). 実習指導者講習会が指導者の役割遂行に及ぼした影響. 人間看護学研究, 77-90.